# **三企画展**- **藍染の型紙展** 一波佐地方の紺屋の型紙 500 点一 会期 7 月 1 日 (金) ~12 月 28 日 (水)

# 『藍染の型紙展』に寄せて

今回の企画展は、波佐地方での紺屋の藍染に用いられていた伊勢型紙500点の中から常時入れ替え展示して、より多くの型紙をご覧いただきたく存じます。以下、伊勢型紙についての資料説明を参考になさって、企画展をご覧くださいませ。

なお、詳細について、ご質問などございましたら、企画展責任者(携帯電話:090-4697-2818)まで、お問合せ 願います。

2016年7月1日

## 浜田市金城歴史民俗資料館

# 波佐地方の紺屋について

文化・文政の頃、東谷村(金城町長田)の室屋谷・源右衛門源次は、紺屋職を営み藍染を業としていた。天保年間になって、後添えとして来た嫁の弟堂追・紋治に紺屋職を譲り、その子愛吉が受け継ぎ、明治中期まで紺屋職を営んだ。

今回の藍染の伊勢(白子)型紙は、江戸末期から明治中期までの間に使用していた伊勢型紙500点である。 なお、西谷村(金城町波佐)の栗ノ木田・小林久太郎は、明治末期頃から紺屋職を営み、昭和18年頃まで藍染 を業としていた。

#### 【型地紙(かたじがみ)】

型紙には、美濃紙が使用されました。美濃地方では型紙専用の簀桁(タテ・ヨコ用)を用いて漉いた 薄い和紙を 3~4 枚をタテ・ヨコ漉きの和紙を交互に柿渋で貼り合わせて強靭な型地紙を作ります。この 生紙を天日に干し、一週間の燻蒸による強度を生み出し、伸縮をしない型地紙が生み出されます。

型紙が使用されるまでには、約1年間(製造工程と寝かせ期間)の工程を経て半永久的な型紙として、 漸く使用され、修理も可能なものとなります。

#### 【彫刻技法】

基本的には、突彫、錐彫、道具彫、縞彫の 4 つの技法が組み合わされて、製作されます。糸入れとして補強される場合もあります。

彫師が使用する小刀はすべて彫師が自ら製作します。一度に、7~8 枚の型紙を重ねて縦横 1 分の狂い もなく製作されます。2,000 本もの道具(小刀)を所有する職人もいます。

#### 【錐彫(きりぼり)】

半円筒型の刃先を、地紙に垂直に立て、半回転させ丸い穴を明け、その作業の連続で柄を作ります。 鮫・行儀・通し・霰などの錐小紋柄が、この技法で作られます。製作に1か月を費やすものもあります。



#### 【突彫(つきぼり)】

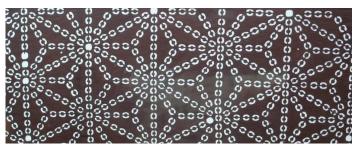
5~6 枚程度重ねた地紙を穴のあいた穴板の上に乗せ、刃先を鋭く砥いだ小刀を垂直に突き立て、上下 に動かしながら前に押すように彫り進みながら作業をします。

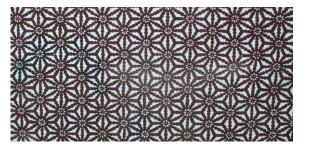




【道具彫 (どうぐほり)】

2 枚合わせて作られた刃先を、菱・角・花びら等、多様な形に加工します。職人さんは柄に合わせた何 百本の道具を作りその道具を使いこなして、絵柄を彫っていきます。





【縞彫(しまぼり)/引彫(ひきぼり)】

直線を何本も彫って縞模様を形づくる技法です。鋼の定規に小刀をあて、手前に引きながら、均等感 覚に縞柄を掘ります。縞彫、引彫とも呼ばれています。後で、糸を入れて貼り合わす。





←糸入れのもの

### 【糸入れ】

縞柄などは、染色時に模様がずれるため、型の補強の目的で「糸入れ」を行う。彫り上げた型紙を 2 枚用いて、細い生糸を用いて文様と 90 度の角度で、 $2\sim3\,\mathrm{cm}$  間隔で糸を張り、柿渋を使って貼り合わせる。  $4\sim5$  日の乾燥でできあがる。

#### 【型紙の使用方法】

型紙を使用する前に、型紙を水につけて、伸縮防止をはかります。反物の上に型紙を置き、防染糊を置いていきます。一色につき一回ずつ染めるため、柄によっては何回もこの作業を繰り返します。糊のついた反物を染料で染めては、糊を洗い落します。糊を洗い落すと、そこが白くなり模様が完成します。







